第8回

人と自然の共生国際フォーラム

The 8th international Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings

第8届 人与自然和谐共处国际论坛 | 제8회 사람과 자연의 공존 국제포럼 | 8º Fórum Internacional de Convivência entre o Ser Humano e a Natureza

自然と共に歩む 明日をつくろう

Building a Future for Nature and Humanity

与自然和谐相处，共创美好未来

자연과 함께 가는 내일을 만들자

Vamos construir um futuro para coexistir com a natureza

報告書 - 概要版 -

2014.10.4（土）

活動助成事業発表会・意見交換会

会場／パルティせと

2014.10.25（土）

人と自然の共生国際フォーラム

会場／地球市民交流センター（愛・地球博記念公園内）

パートナーシップ事業 ESD AICHI-NAGOYA 成功させよう！ ESDユネスコ世界会議

Kaisho SATOYAMA Forum

主催／人と自然の共生国際フォーラム実行委員会（愛知県、瀬戸市、愛知県国際交流協会、中日新聞社、名古屋大学、愛知県立大学、大学コンソーシアムせと、NPO法人海上の森の会、認定・NPO法人才の木、あいち自然環境団体・施設連絡協議会）

後援／総務省、環境省、経済産業省、農林水産省、一般財団法人地球産業文化研究所、一般社団法人中部経済連合会、名古屋商工会議所、独立行政法人国際協力機構（JICA）中部国際センター、東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林生態水文学研究所、愛知県森林協会、公益社団法人愛知県緑化推進委員会、愛知県森林組合連合会、一般社団法人愛知県農林公社、愛知県自然観察指導員連絡協議会、森林インストラクター会“愛”

開催報告

第8回 人と自然の共生国際フォーラム
The 8th international Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings

自然の叡智をテーマに開催された２００５年の愛・地球博の理念と成果を継承し、人と自然が共生する持続可能な社会づくりに向けた大きな潮流を創り出すため、平成１９年から「人と自然の共生国際フォーラム」を開催しています。

第８回となる今回は、ユネスコが ESD の柱として挙げている項目のうち、これまでのフォーラムで議論してきた「生物多様性」「文化の多様性」「持続可能なライフスタイル」について愛知の森林・里山を通して改めて考え、持続可能な社会を支える担い手づくりを考えました。

◆メインテーマ◆
自然と共に歩む明日をつくろう
Building a Future for Nature and Humanity

◆サブテーマ◆
愛知の森林・里山から始める「持続可能な社会に向けた人づくり（ＥＳＤ）」
Education for Sustainable Development, Starting with Aichi's Forest and Satoyama

10.4（土）

活動助成事業発表会（アクション・プレゼンテーション）・意見交換会（グループディスカッション）
会場／パルティせと

パルティせと

10:00-13:30 **活動助成事業発表（アクション・プレゼンテーション）**
愛知県内の森林・里山において、持続可能な社会のためのＥＳＤ活動を実施した7団体の活動発表。

13:40-15:40 **意見交換会（グループディスカッション）**
アクション・プレゼンテーションを行った7団体と一緒に「生物多様性」「持続可能な暮らし」「地域文化と先人の知恵」の三つのテーマで人と自然の共生について意見交換。

10.25（土）

人と自然の共生国際フォーラム
会場／地球市民交流センター（愛・地球博記念公園内）

体験学習室

10:00-12:00 **活動紹介**
アクション・プレゼンテーションを行った7団体の活動と、中日新聞のＥＳＤ「地球未来こども塾」の活動を紹介。

「花まつり　志多ら舞」演奏（12:00-12:20）

13:00-13:15 **開催の式典**

13:15-14:30 **特別講演**
テーマ　森は海の恋人　人の心に木を植える　畠山 重篤 NPO法人森は海の恋人 理事長

14:40-16:10 **パネルディスカッション**
テーマ 自然と共に歩む明日をつくろう
サブテーマ 愛知の森林・里山から始める「持続可能な社会に向けた人づくり（ESD）」
- 森林・里山における「持続可能なライフスタイル」「文化の多様性」について
- 「生物多様性」とともに、獣害・外来種問題など、野生生物と人間の軋轢について
- ＥＳＤに対する企業の取り組みについての各分野からパネリストを迎え、開催。

16:10-16:30 **映像鑑賞** 北設楽郡東栄町の風景等の映像を放映。

16:30-16:45 **フォーラム宣言・閉会式**
フォーラムのまとめとして、フォーラム宣言を採択して発信。

17:00-18:30 **交流会**

活動助成事業発表会（アクション・プレゼンテーション）

本年は、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）ユネスコ世界会議あいち・なごやが開催されるため、この趣旨と合致し、これまでの7回のフォーラムで議論してきたテーマにそって実施する事業を３～４月に募集しました。

審査によって選ばれた７事業の活動団体に活動状況の発表をしていただきました。

アートあそびプロジェクト「森はアトリエ ～土でいろいろ～」

tre punte（トレ・プンテ）

アートプロジェクトを３人で企画・運営をしているグループで、アートと遊びを組み合わせたプロジェクトを実施。今回は、「土でいろいろ」というテーマで子供たちと一緒に遊び、自分が大きな自然の中で存在しているということを感じてもらった。まず皆で大きな紙に土で絵を描き、次は自分たちで掘ってきた土に水を混ぜて作った粘土で造形作品を作成した。

オーガニックフラワーと刈り草堆肥づくりと落ち葉堆肥づくり

オーガニックフラワー名古屋女子会

ＣＯＰ１０の後、心の病を抱えた方と自助会を作り、環境活動に取組んでいる。一般に売られている切り花は農薬による手荒れがひどく深刻な問題。完熟堆肥を用いたオーガニックフラワーの生産を提案した。腐葉土の切り返しをして空気を入れ、水分調整をしながら堆肥を作成。完熟堆肥、オーガニックフラワーの生産モデルを作ることを目標とした。三重県の堆肥マイスターの橋本幸雄氏の指導をうけ、枯れ草と落ち葉の２種類の堆肥を作成した。他に交流会を実施し精神障害の友人も参加し、堆肥講座とアロマの提案をした。

設楽・里山森林保全活動

設楽・里山森林保全プロジェクト

設楽・里山森林保全プロジェクトの活動は、東三河で活動している豊川流域自然教室と設楽町で活動している設楽を歩く会２団体が合体し、「里山、設楽の雄大な自然の中を歩きながら、「自然のエネルギーや小水力発電を学ぶ会」「オオムラサキのさなぎの羽化の観察会」「皮むき間伐」の３つの事業を設楽町で実施した。

タンスの着物に“おはよう！”プロジェクト～キモノ姿で森を歩こう～

TEAM　OKL（アウトドア着付けレッスン）

着物に親しみの薄い方に、着物のことを知ってもらうため、公園で着付けレッスンを行っている。今回は里山を舞台にさつき書道会の澤田佳久氏と里山と書道と着物をコラボした「たんすの着物におはようプロジェクト」を２日間、計４回開催。着物で山を歩くという非日常の中で聞いて感じたことを障子紙に筆でサウンドスケッチした。たんすの鍵を開け、持続可能な暮らしを始めようとすることで、先人の知恵を受け継ぎ、豊かな暮らしを送るための扉を開けることができると考える。

地域で子育てと教育を考える会

鎮守のもりのなかまたち

人間界と自然界の境界線をテーマにした。昔境界線は明確でありそれらは秩序を守るために存在していた。今では迷信、畏怖、あがめる気持ちが薄れている。「妖怪のお話を聞く」「妖怪の居る場所を探そう」「妖怪に変身　森探検」の三つの企画を実施した。森を散策して、実際に自然の気配を感じ、森の生き物妖怪に五感を生かして、森を探検した。

ながくてピクニック in 愛知芸大の森

ながくてピクニック in　愛知芸大の森実行委員会

「音楽」「食」をもとにコミュニケーションの場を作ることが主なテーマ。野菜を収穫し、参加者がイベントのいろんなものを設えたり調理をした。災害への備えでは土地の人たちとのコミュニティーがすごく大事。おいしい食べ物を食べるとか、いい音楽を聞くとか、豊かな自然の中でみんなで遊ぶといったことは、誰もが楽しめること。誰もが共通して持っている感覚をもう一回掘り起こして、テーマにすれば、誰もが来てくれる。それこそが、ながくてピクニックの目指すもの。

「森ヨガ」in 海上の森～人も自然の一部なんだ～

Yoga Rainbow

２カ所で森ヨガを開催。自然との一体感、体を動かすことの心地よさ伝えたい。ヨガで心も体も健康になって、豊かな生活が生まれる。そんな社会を目指している。ヨガとは、サンスクリッド語でつながるという意味。自然を感じながらの人と自然のつながり。自分の内側を見つめる、自分と自分とのつながり。また、相手を信頼し、力を借りてポーズを作る、人と人とのつながり。さまざまなつながりを感じながら、心と体を健康に導く森ヨガの活動をこれからも続けていく。

意見交換会（グループディスカッション）

名古屋大学大学院生命農学研究科の田中隆文先生をファシリテーターに迎え、アクション・プレゼンテーションを行った７団体を含む４１名の参加者が、

Ａ．生物多様性　Ｂ．持続可能な暮らし　Ｃ．地域文化と先人の知恵

の３つのテーマで５グループに分かれ、意見交換と発表を行いました。発表後に、田中ファシリテーターから総括があり、すべてのグループに共通したキーワードとして、「つながり」という言葉が当てはまるのではないか、とのコメントをいただきました。

また、意見交換会の討論結果は１０月２５日の「パネルディスカッション」に活かされました。

A 生物多様性

“手間を楽しむ” を流行らせる。早く気付いてほしい。外来種はたして悪者か。必要悪、これも多様性。

B 持続可能な暮らし

持続可能な生活・人間も地球の一員・みんなの自覚。若い層へどう伝えるか・興味のない人までにどう伝えるか。

C 地域文化と先人の知恵

つながりとテクノロジー・自転車。

市民のEXPO　出展団体紹介

屋内広場と食の広場では、「市民のEXPO」と題して、海上の森の森林学習セミナーをはじめ、自然環境関係団体による体験ブースやポスター展示を展開しました。また、助成団体及び中日新聞のESD「地球未来こども塾」の活動紹介をはじめ、志多らの和太鼓演奏やsweetmagicによるライブなど多様なイベントが行われました。

市民のEXPO 出展団体

① 愛知県森林保全課森と緑づくり
② 推進室森林里山再生グループ
③ あいち海上の森センター
④ 大府市自然体験施設二ツ池セレトナ
⑤ 認定NPO法人　才の木
⑥ 愛知県環境部自然環境課
⑦ 樹恩ネットワーク
⑧ 株式会社豊田自動織機
⑨ 愛・地球博記念公園公園マネジメント会議
⑩ NPO法人　海上の森の会
⑪ ネイチャークラブ東海
⑫ 株式会社伊藤園
⑬ あいち自然環境団体・施設連絡協議会（あいち自然ネット）
⑭ 愛知海上の森大学同窓会
⑮ 愛知県シェアリングネイチャー協会
⑯ tre punte（トレプンテ）「アートあそびプロジェクト」
⑰ 設楽・里山森林保全プロジェクト
⑱ オーガニックフラワー名古屋女子会
⑲ TEAM OKL（アウトドア着付けレッスン）
⑳ Yoga Rainbow
㉑ 鎮守の森のなかまたち「もりのこ倶楽部」
㉒ ながくてピクニック in愛知芸大の森実行委員会
㉓ 南遊の会
㉔ 東アジア里山研究会＆南山大学総合政策部藤本ゼミ
㉕ NPO法人　森は海の恋人
㉕ 愛知県緑化センター
㉖ NPO法人　山の幸染め会
㉗ 中日新聞社
㉘ ESD　LOVERTH
㉙ 自然の叡智・撮り歩き隊
㉚ 公益社団法人愛知県緑化推進委員会
㉛ 尾張自然観察会
㉜ NPO法人　東海自然学園
㉝ みどりのまちづくりグループ
㉞ 志多ら
㉟ sweetmagic

活動助成団体「地球未来こども塾」

ステージイベント（体育館前）

特　別　講　演

テーマ　森は海の恋人　人の心に木を植える

畠山 重篤　NPO法人森は海の恋人 理事長

Shigeatsu Hatakeyama

1943年中国上海生まれ。県立気仙沼水産高校を卒業後、家業の牡蠣養殖業を継ぐ。海の環境を守るには海に注ぐ川、さらにその上流の森を守ることの大切さに気付き、漁師仲間と共に「牡蠣の森を慕う会」を結成（2009年、NPO法人森は海の恋人を設立）。1989年より気仙沼湾に注ぐ大川上流部で、漁民による広葉樹の植林活動「森は海の恋人運動」を行っている。この活動は、小・中・高校の教科書にも紹介されている。東日本大震災で牡蠣養施設等の全て失うが、震災後も自然環境を活かした地域づくりを展開している。
朝日森林文化賞（1994年）、緑化推進功労者内閣総理大臣表彰（2003年）、宮沢賢治イーハトーブ賞受賞（2004年）、国連森林フォーラム（UNFF）「フォレスト・ヒーローズ」受賞（2012年）等。

講演内容要約（事務局文責）

カキの養殖業は、世界中どこでも淡水と海水が混じりあった汽水域で行っている。広島は日本の養殖カキの生産量の約６割を生産しているが、これは広島湾に注ぐ１級河川太田川の影響が大きい。太田川の上流、島根県境に広大なブナ林があり、ブナ林に降った雨が太田川を通って広島湾に注ぎこみ、カキのエサになる植物プランクトンが発生する。プランクトンは目に見えないほど小さな生物であるが、１個のカキが１日に２００リットルもの海水を吸い、酸素と共にプランクトンを濾し取って食べている。海の水だけではなく森に降った雨が腐葉土の層を通って川から海まで流れでることによりエサが増え、カキも大量に生産できる。

川の流域が開発されていくと、流域の森林が荒れてくる。そうすると赤潮が発生し、汽水域の生物のバランスが壊れてしまう。赤潮にまみれた海を、珪藻類が繁殖する海にどう改善すべきかを考えるために、河口から上流に向かって、人々の暮らしを観察しに行った。

昔は排水規制があまり厳しくなかったため、工場などから汚れた水が海へ流れ出て、真っ黒になり悪臭を放っていた。合成洗剤を使った洗濯機の排水もそのまま海へ流れていた。少し上流に遡ると水田地帯になった。水田を見ると農薬や除草剤を大量に使っていたため、生き物がいなくなっていた。この状況をみて、海で働く漁師と農家の人とが話し合わなければいけないと思った。さらに遡るとダムで階段状に川が塞がれていた。せっかく森の腐葉土の中で出来た養分がダムで止まってしまっていた。人間の生活だけを考えれば洪水対策など防災が優先となるが、自然界の流れとして、やはり川を堰き止めてしまうことは、自然を壊すことになる。川を全部止めてしまうとシジミやアサリなどが獲れなくなる。

さらに遡って、山まで行ってみた。戦争で木材が足りなくなり、国の拡大造林計画でスギ、ヒノキの一斉植林が始まった。ところが、木材の輸入自由化が行われ、外国の木材のほうが安いということで日本の山を放置してしまった。間伐することを前提に植えているので放置すると、枝と枝が混んできて、日の光が差し込まなくなり、下草が生えてこない。そうすると雨が降るたびに土砂が川へ流れ出て海まで来てしまう。結局最後はすべての負担が海へ来てしまう。日本の沿岸域の海が疲弊しているのは、全部が海の問題というわけではなく、流域に住む人間の問題でもある。

当時、山、川、海、農地と人間の生活のトータル的なメカニズムを研究する学者や管理する行政がなっかたので、腹を決めて自分たちで出来ることをしようと、気仙沼に住む漁師を集めて、河口から３０キロ上流にある、大川の源流域の室根山に落葉広葉樹の雑木林を作る活動を始めた。

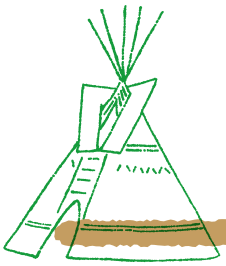
物事を始めるにはスローガンが必要で、私は『ワカメもカキも森の恵み』と考えたが評判が良くなかった。そこで歌人の熊谷武雄氏の歌『手長野に木々あれどもたらちねの柞（ははそ）のかげは拠るにしたしき』に出会った。これは、手長山にはいろんな木があるけれども、柞（ははそ）、つまりナラの木の林に近づくと、お母さんのそばに行ったように心が休まる、という歌である。その後熊谷武雄氏の孫に当たる熊谷龍子氏に『森は海を海は森を恋いながら悠久よりの愛紡ぎゆく』と言う歌を詠んでもらい、『森は海の恋人』という言葉が生まれた。　この活動のことが、高校１年生の英語の教科書に掲載されることになったが、『森は海の恋人』の英語訳が上手くできず困っていた。全国植樹祭で皇后陛下にお会いした際にそのことを相談すると皇后陛下からヒントをいただくことができた。ヒントは「long for」と言う熟語を使ったらどうかというものだった。旧約聖書にも登場するこの「long for」には、「熱愛する」という意味もあるが第一義的には、「慕う」という意味である。つまり、森は海を慕い、海も森を慕っているということ。これを英語の先生に相談したら、現在進行形にしてはとのアドバイスがあったので、『The forest is longing for the sea, the sea is longing for the forest』となった。

２０１１年は国際森林年で、アジア代表のフォレストヒーローとして私はニューヨークの国連本部に行き、皇后陛下のこの『森は海の恋人』を披露した。

こうした柞（ははそ）の森が重要であるのは、森から養分が供給されることにより、汽水域のプランクトンの発生が促されるためである。科学的には、森林の腐葉土の層の中でつくられた、安定した鉄が流れ込むことにより海が豊かになると研究されている。

愛知県では、海上の森を中心にして万博が開かれた。単に森の中で考えるだけでなく、森と海とをつなげた形で、三河湾の流域をきれいにするのは愛知県の皆さんの務めだと思う。一番重要なことは、流域の人の心にも森を作らなければいけないということである。

気仙沼湾も本当に赤潮にまみれた海でどうしようもなかったが、２０数年かけて私たちは背景の森林をちゃんと整備して、それから川の流域に住んでいる子供達も含めて、環境教育・体験学習を延べ１万人に対し実施してきた。そうした活動の結果、川の水質が良くなった。つまり、川の流域に住んでいる人々の心の中に森が育ってきた。そしてダム計画も中止になり、東日本大震災の津波の後、生き物のいなくなった海にも川から栄養が供給されて、すぐにプランクトンが増加して海が回復した。だから『森は海の恋人』という言葉が真実になった。最後に英語の教科書をもう一回復唱します。『The forest is longing for the sea, the sea is longing for the forest』。



パネルディスカッション

テーマ　愛知の森林・里山から始める「持続可能な社会に向けた人づくり（ESD）」

- 森林・里山における「持続可能なライフスタイル」「文化の多様性」について
- 「生物多様性」とともに、獣害・外来種問題など、野生生物と人間の軋轢について
- ＥＳＤに対する企業の取組について

左記の各分野からパネリストを迎え、さらに１０月４日に行われたグループディスカッションの結果も踏まえたパネルディスカッションを行いました。その後、コーディネーターの川井秀一先生によって「第８回フォーラム宣言」の案がまとめられ、会場の皆様の拍手によって採択されました。

コーディネーター

川井 秀一

Shuichi Kawai

京都大学大学院総合生存学館 学館長
日本学術会議会員
認定NPO法人才の木 理事

日本木材学会会長、日本材料学会副会長等を歴任するなど、林産科学・木質工学の分野で数々の業績を残している。木材利用の普及啓発活動にも積極的に取組み、日本木材学会の「日本の森を育てる木づかい円卓会議」を前身とした「ＮＰＯ法人才の木」を立ち上げ、木づかい、森づくりの環境ネットワークづくりに取り組んでいる。

コメンテーター

マリ クリスティーヌ

Mari Christine

異文化コミュニケーター
あいち海上の森センター　名誉センター長
国連ハビタット親善大使

父親の仕事に伴い4歳まで日本で暮らし、その後ドイツ、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。単身帰国後、上智大学国際学部比較文化学科卒業。大学在学中に芸能活動も開始。94年東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。今現在も都市工学を学んでいる。幅広い視点から国際会議・式典等の司会、講演活動を多数こなす。

アドバイザー

田中 隆文

Takafumi Tanaka

名古屋大学大学院生命農学研究科　准教授

2000年より現職に就く。2003-2004年James Cook大学（豪州）熱帯雨林研究センター客員研究員。三重大学生物資源学部非常勤講師。森林水文学・砂防学が専門であり、砂防学における「知の野生化」研究会を主宰する。著書に『環境問題はイメージでは解決しない。』『「水を育む森」の混迷を解く』がある。

パネリスト

金城 愛

Ai Kinjo

東栄町地域おこし協力隊・
燈栄隊隊員

「あいちの山里で暮らそう80日チャレンジ」挑戦者
平成24年度に「あいちの山里で暮らそう80日間チャレンジ」で東栄町の暮らしを体験した後、平成25年4月から東栄町に移り住み、地域おこし協力隊「燈栄隊」の隊員として、耕作放棄地の再生、地域のコミュニティー活動の補助などに取り組む

矢部 隆

Takashi Yabe

愛知学泉大学
現代マネジメント学部　教授

平成カメ学(爬虫類学)、生態学、行動学、保全生物学を専門とし、カメの生態や行動の研究を中心に水辺の自然環境に関する分野で活躍。著書は『里山の生態学』、『淡水生物の保全生態学』、『動物たちの気になる行動（２）ー恋愛・コミュニケーション篇ー』（共著）など多数

石川 喜一朗

Kiichiro Ishikawa

株式会社石川マテリアル
代表取締役社長

平成13年から株式会社石川マテリアル代表取締役社長に就任。石川マテリアルは、古紙や金属スクラップ等のリサイクル企業であり、平成13年に先導的資源化貢献企業として愛知県資源再生利用化貢献者表彰を受けている。

■コーディネーター　川井秀一

このフォーラムは、愛・地球博の理念を継承して８回を数えるまでに至りました。第８回は『愛知の森林・里山から始める「持続可能な社会に向けた人づくり」』というテーマで、今日はさらに一歩進んで、未来を担う教育、人の作り方のあり方について、11月に世界会議がこの愛知で開催されます「ＥＳＤ」を念頭に置きながら、われわれがこれまで大切にしてきました生物も文化も多様性をお互いに認め合うような、そういったライフスタイル、こういうものを考えていきたいと思います。

ではまず、名古屋大学の田中先生から活動助成事業発表会と地球未来こども塾の内容について紹介をいただいて、その後、パネリストの方々から様々な話題を提供いただきます。

■アドバイザー　田中隆文

まず、活動助成事業発表会ですが、７つの団体からアクションプレゼンテーションにより活動紹介がありました。その後、７団体の方々にも加わっていただき、「生物多様性」「持続可能な暮らし」「地域文化と先人の知恵」について、５つのグループに分かれて意見交換会を実施しました。「つながり」がキーワードでした。

中日新聞のＥＳＤ「地球未来こども塾」は、１５０人の小学校６年生を公募し、２泊３日の合宿形式で、様々な伝統的な文化を体験していこうという活動です。自然生態、伝統文化、そういうものに向き合って、そして様々な出会いがあり、皆と仲間となり、その中で多様な観点、価値観からできることを考えていこうという形の企画でした。

■コーディネーター　川井秀一

それでは、パネリストの方から話題提供いただき、話を進めていきます。

■パネリスト　金城　愛

東栄町では人と人とのつながりや、協力する助け合いの精神がこの町には根付いていると感じました。不便ですが、そんな暮らしの中で気付いたことは今までいかに便利な物事の中で、当たり前のように生きてきたことです。里山や田舎の文化に触れて、少しずつ価値観が変わり始め、便利ではなくてもいいということを思いました。物があふれてないから知恵が生まれます。自然と共に生きる町の暮らしや文化を、そういう田舎の人たちは楽しんでいます。東栄町は、県内県民所得最低の町といわれ、高齢化率も45%です。それでも私は豊かだと感じています。

まず難しいことは考えず、ご自身で実体験をし、自分の住む地域や日本の未来、世界の未来のことを考えて、小さなアクションに変えていってもらえたらいいなと思います。

■パネリスト　矢部　隆

中山間地で頻発する獣害は人間が引き起こした問題でもあります。これら動物たちが人里に出てくるようになった理由の一つは、これらの捕食者であったオオカミを人間の手で絶滅させてしまったことです。もう一つは、里地・里山の整備・管理を怠ったことです。緩衝地帯である里山の手入れをしないと、うっそうとおい茂り、緩衝地帯を失ってしまうと、野生動物と人間生活が近接し、獣害が発生します。

里山においては、野生動物を適正管理する必要があります。適正管理するためには、とにかく人が入らなければなりません。人がまず行って、生き物を見て、里地・里山の楽しさを感じて、本来の姿のことを勉強し、民、官、産、学が一体となって、人の手をどんどん入れて、適正管理していくことが必要です。

■パネリスト　石川喜一朗

紙のリサイクルとＥＳＤについてお話します。㈱石川マテリアルは古紙や、鉄スクラップをリサイクルしている会社です。

各家庭で、段ボール、新聞、雑誌と分けて出すという国は、世界には例がありません。日本特有の文化と言えます。日本は資源の少ない国なので、もったいないという精神により、ずっと以前から古紙などの不要物を積極的に利用してきました。古紙の利用率、回収率では日本は７８％で世界のトップレベルです。

出前授業や工場見学会などを開催して、古紙のリサイクルがなぜ必要か説明しています。木は森で育ち人間にとって大切な酸素や生態系を提供してくれるので、紙のリサイクルを通じて里山や森林の保全を伝えていきたいというふうに考えており、そういった事業を行っています。

■コーディネーター　川井秀一

パネリストの皆さんから話題を提供いただきました。私からパネリストの皆さんに話題、質問を投げ掛けて、答えていただく形でこの会を進め、また時に応じてコメンテーターのマリさんや会場の皆さんからもお話を伺ったりさせていただきます。金城さんから、東栄町に住んでどのように感じているか感想をお聞きします。

■パネリスト　金城　愛

今、一町民となり、実際暮らしてみると、大変だと思うこともたくさんありますが、逆に、触れられる文化や人のつながりなど、新しい発見があり、面白いと感じています。

■コーディネーター　川井秀一

燈栄隊の他の４名の方はどのような活動をしていますか。

■パネリスト　金城　愛

他には、協力隊として戻ってきて家業のきのこの農家を継ぎ農業でやっていけないかって考えたり、大学との連携事業をしたり、廃校の理科室を改装してカフェにして、石窯を使って、地域のものをＰＲしたりしています。

■コーディネーター　川井秀一

皆さん、それぞれミッションを持っているのですね。全員が共同でやるようなこともあるのですか。

■パネリスト　金城　愛

石窯を活用したＰＲ活動では、５人でローテーションを組んで助け合っています。

■コーディネーター　川井秀一

メンバーの方が今日、来ておられているなら、少しコメントいただけませんか。

■燈栄隊隊員

ピザを焼く体験を、イベントに出店したり町内を回ったりして対外的なＰＲと町民の交流の場となるように、２通りのやり方を行いながら模索しています。

■コーディネーター　川井秀一

次に、矢部先生。外来種が入ることによって、むしろ生物の多様性が増えているのではないか、といったような質問を投げ掛けられていましたが、この点についてどのようにお考えですか。

■パネリスト　矢部　隆

生物多様性を英語で言うと、バイオロジカルダイバシティ。ダイバシティとは、一つのものがパッと割れて、分岐、分化していくことを言い、つまり、生物多様性とは、生き物が適応進化をして、いろいろな場所で分岐、分化して、結果として表れているものですから、人間の手を経て生き物が増えるというのは、生物多様性とは言ってはいけません。

■コーディネーター　川井秀一

生態系をかく乱しているのは人間だということになると、外来種を悪者扱いするのはかわいそうな気もします。

■パネリスト　矢部　隆

悪いのは人間であって、外来種を持ち込でしまった人間の責任で自然から退場してもらうという態度が大事だと思います。反省をもって申し訳ないと思いながら、防除していくことが大切だと思います。

■コーディネーター　川井秀一

防除を民、官、産、学の共同で行うことも大切だと思いますが、具体的に教ええてください。

■パネリスト　矢部　隆

生物多様性に関する問題が生じたときに、市民の方々は、その地域の生物多様性が財産だという認識を持って、何か問題が生じたら関わる主体であっていただきたいのです。学の世界からは情報を提供して、説明する立場の人が必要です。

■コーディネーター　川井秀一

もったいない精神等日本の精神文化は、世界ではほとんど見られないことなのでしょうか。

■パネリスト　石川喜一朗

過去にヨーロッパ、イギリス、ドイツ、アメリカ、中国、インドネシアなど１２カ国へ視察に行きましたが、日本のように、家庭で段ボール、新聞、雑誌と細かく分けて排出するという習慣はありません。ヨーロッパの古紙は、まとめて回収されるため、ごみが多く入ってしまい、品質が低下します。

■コーディネーター　川井秀一

道徳的な高みだけでは、なかなか人は動かないと思いますが、経済的なレベルでも前に進めるような、インセンティブっていうのはあります。

■パネリスト　石川喜一朗

里山も自然も人間にとって、良いことなのだということを伝われば、みんな協力してくれるのではないかと思います。

■コーディネーター　川井秀一

理解を深めることによって、社会や自然にとって良いことが伝わっていくことが、前に進めていくインセンティブになるということを伺って大変面白いと感じました。

金城さん、田舎の暮らしは楽ではないけどその不便がまた楽しいのだということですね。そういったところの楽しみを少し教えてください。

■パネリスト　金城　愛

こんにゃくやいもをアク抜きして、形を作って、こんにゃくを作ったり、畑で育てた大豆を、ミキサーに掛けて、にがりを入れてって豆腐を作ったりします。

■コメンテーター　マリ　クリスティーヌ

今やられていることを、一つの形にしながら、例えば沖縄や東北でも、同じような結果が生まれるのか、そういうことも考えて活動をしているのですか。

■パネリスト　金城　愛

来る人も迎える人も楽しんで、人と人のつながりができて、それが町全体に広がっていけばいいなと考えています。

■コメンテーター　マリ　クリスティーヌ

先ほどの矢部先生の話で、愛情を持って、環境のことを考えて防除しないといけないということも、とても重要だと思います。石川さんのお話で、もったいないという共通な形で、どうやってこれを、その古紙のリサイクルっていうものも、認識してもらえる、そういうベストプラクティス方式を考えられているならお聞きしたいです。

■パネリスト　矢部　隆

ベストプラクティスを実現するには、地域の守り人が居るということが第一条件です。

■コーディネーター　川井秀一

ＣＯＰ１０ネットで、外来種を食物連鎖の中に入れてしまう運動をしていますが、実際に食べるということによって、その重要性を理解していくという教育の仕方もあるのではないかなと思います。

■パネリスト　矢部　隆

食べるっていうのも一つの方法ですが、気をつけたいのは、養殖です。野外で自然に捕れたのは、捕れたものでありがたくいただく。半分は遊び心、半分は命頂きますという心で、これを生態系のサイクルに組み込もうとはしないほうが無難だと思います。

■パネリスト　石川喜一朗

日本人のみんなに迷惑掛けないとか、公を守るとか、そういう意識がないとなかなか難しいのかもしれません。

■コーディネーター　川井秀一

若い人にどのように伝えるのかっていうのが、われわれから世界に発信していくのをどのようにしていくのかをパネリストの皆さんにお聞きしたいと思います。

■パネリスト　金城　愛

私たちの協力隊はまず、田舎で楽しく暮らしている姿を見てもらうことかなと思います。都会の方も、何か面白そうと興味を示してもらえるように、私たちが、イキイキしてれば目を向けてもらえるのではないかなと考えています。

■パネリスト　矢部　隆

里地・里山は、比較的安全に、手近に、自然を楽しめます。大人たちが、童心に帰って、子供達と一緒になって、一緒に遊ぶと言うのも一つの手段だと思います。

■パネリスト　石川喜一朗

自分が人に伝えて初めて人間は成長できるので、伝える人をたくさん作ることによって、伝わっていくのではないと思います。

■コーディネーター　川井秀一

教えることはすなわち自分が学ぶこと、そういった形の広め方が大変重要だというご意見を今聞いて感じました。

今日の皆さんのお話聞いて、便利じゃなくても生きていけると。手間を楽しんで、問題はあるのだけど豊かな精神的な暮らし。物の時代から心の時代へ、少しずつ変化しているのではないかと感じます。見えないつながりが感じられる感性が、今のむしろ若い人にはあるのではないかなと思います。今日は、「つながり」というのは大きなキーワードだと思います。畠山さんの特別講演では、森と海をつなぐのは里であり、森、里、海。里山も里海も、結局人間が行為をすることによって維持していく。そういう人間が非常に重要なつなぎ手になっているのではないかなと感じました。そういう意味で、このフォーラムも海上の森も海にまでつながるような、そういうような運動に広げていきたいと感じています。

第８回 フォーラム宣言

私たちは、これまで開催したフォーラムを通じて、里山が人と自然をつなぎ、地域づくりの場として重要であること、また、自然を持続的に利用する生き方の大切さを学んできた。また、人と自然の未来に向けて、先人の知恵に学び、いま、私たちにできることから行動を起こしていくことの大切さを再確認した。

このフォーラムでは、将来にわたる環境保全のため、持続可能な社会の実現に向けた担い手づくりについて議論した結果、以下の宣言を行う。

① 里山で代々続く持続可能なライフスタイル、文化の継承に、世代をまたいだ地域の連携により取り組む。

② 生物多様性の保全のため、生物多様性への理解を深め、人間活動の影響を十分に考慮した行動と適正な管理を行う。

③ 国内外の森林環境の整備と保全に取り組み、循環型社会の形成に向け、資源の有効利用を一層推進する。

④ 「国連ESDの10年」の最終年、さらには愛知万博10周年を迎えるにあたり、次世代に対し、人と人とのつながり、人と地域とのつながり、人と自然とのつながりを尊重した啓発・教育活動を行う。

今後これらを広く発信し、自らが次世代への手本となる自覚を持ち、具体的に行動していくことを約束する。

平成２６年１０月２５日　第８回人と自然の共生国際フォーラム参加者一同

Kaisho SATOYAMA Forum

第8回 人と自然の共生国際フォーラム

The 8th international Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings

第8届 人与自然和谐共处国际论坛｜제8회 사람과 자연의 공존 국제포럼｜8º Fórum Internacional de Convivência entre o Ser Humano e a Natureza

人と自然の共生国際フォーラム実行委員会

事務局：あいち海上の森センター

郵便番号 489-0857 住所 瀬戸市吉野町304-1

TEL 0561-86-0606 FAX 0561-85-1841 E-メール kaisho@pref.aichi.lg.jp

人と自然の共生国際フォーラム 検索 www.mu-academy.jp/forum

この冊子は間伐材を使用しています